

森の雪といふ題で、新體詩を作らうと、何時かつから、思つて居たのでし
たけれど……」と、静かな氣高い眼ざしを爲て、恍惚と眺めて居たが、鈴音
の片手を握つて、

「田住さん、貴女の様に親切な方は無いわ、貴女のお蔭で、私は今日まで生き
て居ましたのよ、」と、言ふかと思ふと、顔を袖に押し當て、さめくと泣
き入つた。

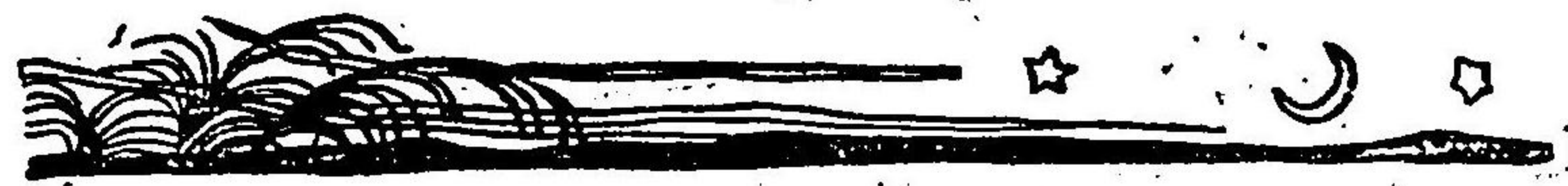
「あら、鎮子さん、何を仰しやるの、其様に氣を弱くなすつて、何うなさるの
よ……」と、鈴音は心配さうに、優しく肩を抱いた。

「麻さんには捨てられるし、義兄には怒られて仕舞ふし、其上、斯う體は弱
いんですもの……田住さん、私、姉が墓の中で、私を待つて居るやうな氣がし
ますの、父も母も、私が往つたら、さぞ喜ぶでせう……」と、泣き噎ふ聲が
震へる。

「また、貴女は……」と、鈴音は慰めるに困り果て、
「鎮子さんもう、暗く成つて来るから、彼方へ往きませう、然うして、今夜は
島川さんのお部屋へ遊びに往きませう……」と、強ひて鎮子を腰掛から立た
しめた。
暮色が迫つて、森に騒ぐ晚鴉の聲が快よからぬ。

四五 命 その六

島川さんの部屋へ往つて、家族合せでも爲て遊んで來ませうと、鈴音は種々に
勧めたが鎮子は往かうと言はないで、兎角に言葉少なに十時頃床に就いた。
虫が知らせるといふ事が世の中には有るかも知れぬと、鈴音は不圖思ふと、床
に入つたが動悸ばかり騒ぐ。



今夜は、何うしても寝てはならぬと思つて居るので、鎮子には怪しまれぬやうに、洋燈を消した暗い中で、目をばつちりと明いて身動きも爲すに居ると、汗が、じり／＼と沸いて熱苦しさに堪へがたい、それにも係はらず、眠つてはならぬと我慢して、隣の床の鎮子の様子に注意してゐると、存外、鎮子は、すやすやと眠つて居るやうである。「あゝ、鎮子さんは、眠つて居る。」と、思ふと、蚊帳に近い蚊の呻聲が、耳から、だん／＼遠くなつて行く、遠くなつたと思ふと、うと／＼と自分は微睡むのである、あゝ、眠るのではなかつた、と、又、眼を明くと周囲は暗い、熱い、睡い、と思ふ胸の底から、

「鎮子さんが若しや……、鎮子さんが若しや……。」と、呼醒ます聲が聴える、
 「眠るまい、眠るまい、」と、思ふ内に、何時か鈴音は、やつぱり、晝の疲れに、何事も知らずに眠つて仕舞つたのである。

「あら、眠つて仕舞つた、」と、不圖、眼を明けると、枕元は、もう白んでゐる、



何處かで鶏の聲がする、隣の床には鎮子が居ない。

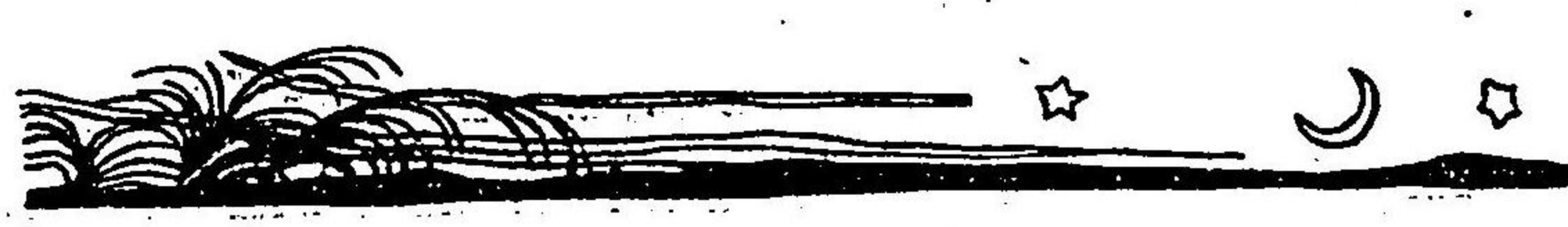
吃驚して起き上つて、蚊帳を出ると、片附いてゐる鎮子の机の上に、一封……

田住鈴音様、鎮子……としてある。

はつ、として、封書を取り上げながら、若しや、若しや、と思つてゐた事が愈よ實現するのではないかと、手が慄く、息が詰まる、窓を開けて、朝の明りに封を切つて半読み下すと、もう氣が動顛して、何うしてよいやら、あたふたと心が騒ぐばかり。

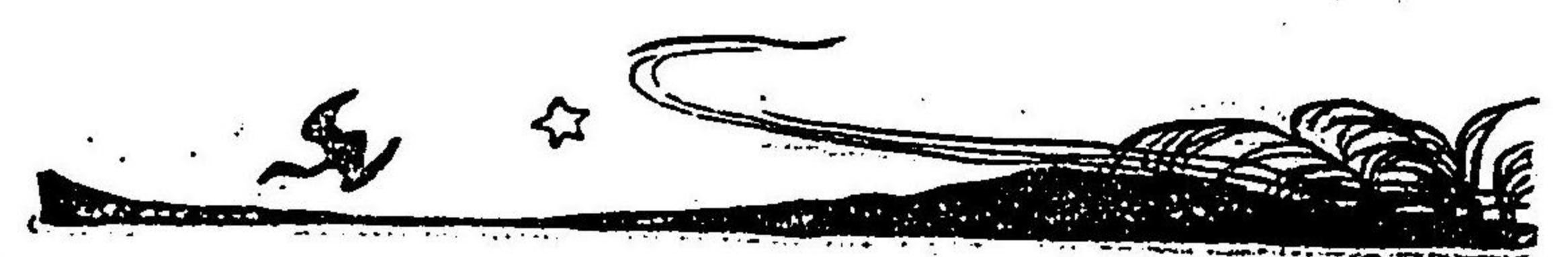
しどけない寝衣姿を繕ふ間も氣が急いで、慄ふ手に、手紙を握つたまゝ、震ふ足を辛と踏み堪へて、無中で階子段を下りると、舎監室の障子の元へ轉ぶやうに寄つて、未だ寢靜まつてゐる他の室を憚りながら、

「先生、先生、」と、聲を小さく周章だしく呼ぶと、眼を醒まして居た壽代は、
 「何方、」と、聴く、



「私で御坐います、先生、鎮子さんが……大變で……ちよつと、往らしつて下さいまし……」と、震聲で言ふのを聴いて、驚いて、毒代が起きて來ると、『これを……御覽下さいまし……』と、鈴音は、持った手紙を差出して、二人して繰り擴げる。

憂世の迫害は、日にく加はり、今は此上永らふる勇氣盡き果て候へば、今宵こそはと覺悟を極め申し候、今更に悲しきは、御前様との御別候、生れながらに、幸薄く、忌はしう生立ちし身を、ようも美しき優しき御袖の蔭に、今日までも庇護ひ給はりしと、ありがたし嬉しと申すも尋常に候、今朝、起きて口漱ぎ候際、俄に氣分悪く夥多に吐血致し候、この吐血にこそ、父も母も姉も、命を奪はれたるものに候へ、保證致し候醫師よりも、己が身は己こそ豫知いたし候よと、思ひ當てたることの今更に悲しう候、小草の尖端に滴る露よりも果敢なく、又は、刈りたる夏草の夏の日に腐れて芥に成るにも似



る、つまらぬ命は、鐵の車の齒に、一思に噛み碎かれんと存じ候、息の止る最後までも呼ぶは御名に候。人は怨まず候、彼の人には別に書き残さず、もし御會ひ下され候事もあらば、怨みてにはあらずと、只御傳へ下されたく、玉木先生の御惠にも、何の御報も致さぬこと口惜しく候。猶くれぐれも申置き候事は、御前様、慶作様と御結婚遊ばされたき事に候。又拜借の金子心ならずもその儘にいたし置き候事、今更なる御恥かしさに候。愛讀いたし居り候ひしオーズオーズの詩集は私と御思ひ遊ばされていつまでも貴女の御側へお置き下されたく候。書き残し置き候此文、御前様御開きあそばされ候折の、御驚きを推し量り参らせ候へども、只何もく御ゆるし給はり度候。かしこ。



壽代は、日頃に見ぬ憂慮の色を眉に浮べて、溜息を吐きながら、くるくると手紙を巻き納める、鈴音は驚きに涙も出ぬ、聲も出ぬ。

その朝、遠からぬ板橋から王子へ續いて居る鐵道線路の側に見るも無様な鏡子の亡骸を見た時は、あまりの淺ましさに、鈴音は、氣を失なうて、壽代の腕に倒れかゝつたので有つた。

病が再發して、半身不隨に成つた禮造が、辛と起き上つた病褥の邊で、分家の老人と、玉木壽代とが媒妁に成つて、鈴音は慶作と祝言の盃を取り交はした、慶作も今日は、盲目縞を脱ぎ捨て、紋付の羽織袴、扇子を斜に構へて座つた様は、自ら大家の主人として恥かしからぬ貫目が備はる、鈴音は水色の絹の單衣に、艶に似合ふ珍らしい高島田、お勢喜も白襟の重ねに眞面目に成つて、禮



造は嬉し泣きに涙を、ほろくんと零して居る。

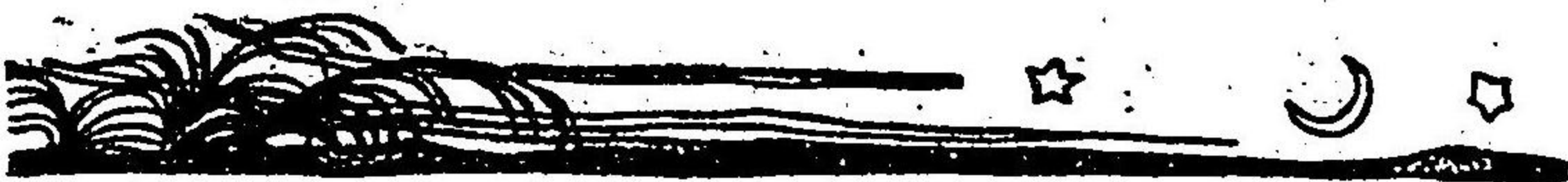
嚴肅に、固めの盃の取り遣りが濟むと、やをら、玉木先生は向き直つて、

「鈴音さん、貴女は、今日から新生活に入りになる、どうぞ、女子大學院の卒業生の模範と成られる様に、私の申上た事をお忘れな様に願ひます、然うして、御両親への御孝養は勿論、御良人へ、何處までも能くお仕へなさらねば成りません、」と、言葉穩かに、生みの親にも勝る、教の師の誠を籠めて言はれると、

「はい、と、小さい聲で言つて、鈴音は、打俯いたが、其時、向き合ふて座つて居る慶作が、涙の露を一雫、はらりと、茶宇の袴の膝へ落したのを見た、刹那に鈴音は、眞實に今日から慶作を、我良人と待かん眞心が沸いた。

それで、其席から退いて、今度は披露の宴に列なるべく、化粧の間へ入るや否や、鏡臺の引出から、鏡子の遺書を取り出して、

命



露

「あゝ、鏡子さん……」と、胸に抱いて泣き伏したのである、其身に厭苦かへた此世の春を怨んで、秋の夕の風に散る露の如く消え去つた、亡き友を今更に

思ふのである。頓て、鏡に向うた鈴音の清しい眼の内には、是れは若草の葉に契る、春の寶石

とも見る露ほどの、潔い麗しい泪が溜つた。店と奥とは、婚禮を祝ぐ人聲に埋まつて、恰も憂なき夢の國のやうに、さうめ

さ合ふ。鈴音の春は、斯くて永久に輝き行くのである。

露 終



明治十四年八月二日印刷
明治十四年八月七日發行

不許復製

露

定價六拾錢

發行所 昭文堂

東京市本郷區弓町
振替口座七六七四番

著作者 大塚楠緒子

發行者 本橋 晴

印刷者 石田道三郎

印刷所 中央印刷所

東京市本郷區本町一丁目

徳富蘆花君序
島村抱月君序
故筑山正夫君譯

クロイチェル

ソナタ

長恨

四六列總クロイチェル美装
定價五拾錢

杜翁名著にして世界の文壇に噴々たる本書は
熱烈なる故人の健筆に依りて譯せられ將に美
装して今秋の文壇を飾らんとす。

258

701

